氏　　名	：	近藤　綾子
専攻分野の名称	：	博士（教育学）
学 位 記 番 号	：	博甲第 267 号
学位授与年月日	：	平成２８年３月１５日
学位授与の要件	：	学位規則第４条第１項該当　課程博士
学 位 論 文 名	：	自閉症スペクトラム障害児の発話におけるプロソディの特徴に関する研究
論文審査委員	：	（主査）　教授　林　安紀子 （副査）　教授　中川　辰雄　　教授　堀田　香織 教授　倉持　清美　　教授　橋本　創一

学 位 論 文 要 旨

自閉症スペクトラム障害（Autism Spectrum Disorders，以下 ASD）とは，社会的コミュニケーションや対人的相互交流に困難が見られ，限定された行動・興味・活動を呈する発達障害である。ASD において見られる言語特徴の一つに，「独特なプロソディ」があり（Asperger, 1944），例えば，抑揚が平坦，独特な句末の音調，甲高い声など様々な特徴が報告されている。近年の研究より，ASD 児ではプロソディの多くの機能に発達的遅れがあることが示唆されている（Peppé et al., 2007）。また音響分析を用いた研究によると，欧米では ASD 児においてピッチ変動が大きいことが示唆されている一方で（Diehl et al., 2009; Nadig & Shaw, 2012），日本国内ではピッチ変動が小さいことが報告されており（近藤・出口，2013; Nakai et al., 2014），このような結果の差異については更なる検討が必要である。さらに，ASD の音声に知覚する違和感や非定型さが，どのようなプロソディの特徴に起因しているのかは明らかになっていない。そこで本研究では，ASD 児のプロソディにおける独特さが何に起因するものであるか明らかにすることを目的とし，言語学的知見を応用して ASD 児の発話におけるプロソディの特徴について検討した。

論文は，序論（第Ⅰ部），本論（第Ⅱ部～第Ⅴ部），結論（第Ⅵ部）から構成した。第Ⅰ部では序論として，国内外における ASD とその言語コミュニケーションの諸問題に関する研究，および ASD 児者のプロソディに関する研究の動向を整理し，本研究における問題と目的について論じた（第 1 章～第 3 章）。本論ではまず第Ⅱ部において日本語のプロソディ，特にイントネーションに焦点を当て，本研究で参考とする言語学的知見および手法について概説した（第 4 章～第 5 章）。

第Ⅲ部では，ASD 児の指導に携わる現場の教員が ASD 児に特有のプロソディの独特さがあることを認識しているのか実態把握することを目的として，都内通級指導教室に勤務する教員を対象とした質問紙調査を実施した（第 6 章）。その結果，ASD 児にプロソディの独特さがあることは，通級指導教室の教員においても共通した認識であることが示唆された。また，プロソディに焦点をあてた言語指導については実践されていないものの，関心を持つ教員も多く，基礎的研究の必要性が示唆された。

そこで第Ⅳ部・第Ⅴ部では，ASD 児 12 名および定型発達児 14 名を対象として 2 種類の音声（会

話音声／課題音声）を収録し，プロソディの特徴について基礎的研究を行った。第Ⅳ部では，対象児と成人実験者との自由対話音声を収録し検討を行った。収録した自由対話音声に対して，まず言語学的知識を有する評定者によって違和感や不自然さを知覚するプロソディの特徴を具体的に記述した（第 7 章)。その結果，発話の長さや，強調の不適切さ，句末音調など様々な側面にプロソディの非定型な特徴が見られた。一方で，全ての ASD 児に共通する ASD 固有の特徴があるわけではなく，どのような特徴が顕在化するかは個人差が大きいことが示唆された。次に，同自由対話音声について言語学的知識の無い評定者による印象評定実験を実施し，言語学的知識を有する評定者の結果と比較して違和感や不自然さをどのような箇所に知覚するか検討した（第 8 章)。その結果，一般的な聴取者が違和感や不自然さを知覚する箇所は必ずしも言語学的知識を有する評定者の場合と一致しなかった。しかしながら，一般的な聴取者にとっても ASD 群の音声の方が違和感や不自然さを知覚する箇所が多く，全体の印象としても違和感や不自然さを知覚されることが示唆された。

第Ⅴ部では，プロソディの要素の中でもイントネーションに焦点をあてた。語彙や文法で規定されるイントネーションの産出について検討することを目的として，発話内容を統制した音声を収録し検討を行った。まず，収録した課題音声について日本語のイントネーションの基本的な要素である，ピッチアクセント・ダウンステップ・予測的なピッチ上昇が実現されているか検討した（第 9 章)。その結果，これらの要素については ASD 児と定型発達児との間に定量的差異は無く，同程度に実現されていることが示唆された。さらに，同課題音声に対して第三者による聴覚印象評定を検討した（第 10 章)。その結果，課題音声については定型発達児と差が無く違和感や不自然さは無いことが示唆された。以上の結果から，少なくとも本研究で収録した 3 文節までの発話については，ASD 児と定型発達児とで音響的にも聴覚印象にも差がないことが示唆された。

以上の研究を総合すると，ASD 児の音声から感じるプロソディの違和感や不自然さは，語彙や文型などで規定されるレベルよりも，語用や談話レベルの問題であり，文脈や場面に応じたプロソディの使用の不適切さに起因している可能性が考えられる。今後の課題として，①3 文節以上の文や複雑な文型の音声や会話音声におけるプロソディについての基礎的研究，②顕在化するプロソディの特徴と個々の ASD 児の特性（自閉症傾向，聴覚処理，脳活動等）との関連性の検討，③プロソディの支援・指導への発展を含む教育学的可能性の検討，以上 3 点を挙げた。